

秋草 瑠衣子

AKIKUSA, Ruiko

デヴィッド・ボウイ

David Bowie

研究概要

2016年1月10日、デヴィッド・ボウイが亡くなった。2日前の彼の69回目の誕生日に新しいアルバム『★』が世界中で発売されたばかりだった。15年前の夏、15歳だった私はボウイの存在を知った日から、彼の表現する全てに憧れた。音楽にも容姿にもライブパフォーマンスにも俳優としての演技にも、全てに惹かれ続けた。いつか会えると思っていた。根拠はないがいつか会えると信じていた。

ボウイはどこにいるのだろう。

私はデヴィッド・ボウイに会いに、彼の生まれ育ったロンドンへ、彼を探す旅に出た。ボウイの生まれた街、幼少期から思春期を過ごした街、70年代にロンドンを離れる時まで過ごした街、その他、彼が過ごした場所を巡ってボウイの存在について考察した。

私にとっては彼の存在そのものが表現の全てであり、概念であった。彼を見つけることは自分自身を見出すことだった。DAVID BOWIEとは単なる音楽家ではないし、ポップスターでも、狭い意味でのアーティストでもない。なぜならボウイとは“概念”そのものだからだ。それはグラムロックの本質に直結している。グラムロックもまた、特定の音楽スタイルや確固とした音楽的特質を持たない“概念”だからだ。

私はロンドンを旅して不思議に思ったことがある。なぜボウイはロンドンを出て行ったのかということだ。ロンドンとはとても過ごしやすい街だ。ボウイがその街から出て行かなければならない理由はなんだったのか。有名になりすぎて過ごしにくくなったという理由ももちろんあるだろう。日本人の私がこの旅でボウイの所縁の地を巡れるほど、現在でも彼のプライベートは完全に失われている。しかし、それだけではない。私はその答えのヒントは彼にとって重要な制作の地となったドイツ、ベルリンにあるのではないかと考えた。ロンドンでのボウイは音楽の中やステージの上で常にかの役柄を演じてきた。彼は自分の位置をロンドン生まれのイギリス人ではなく、着地すべき場所を求める異邦人、つまり宇宙人として設定していたのである。しかし、ベルリンに移住してからの彼はアルバムの楽曲の中で何かの役柄を演じる必要性はなくなった。ベルリンを訪れたことで彼は彼自身を見つけた。当

時のベルリンはベルリンの壁崩壊前で戦争の跡が色濃く残っていた。自分を異邦人と規定したようなボウイがその当時のベルリンに漂っているナチズムを単純明快に絶対悪として自分の外におくようなものの見方はしないだろう。ナチズムとは、本来それを生み出した一部のドイツ人たちだけにその罪を帰せられるものではなく、それはそのまま全ての人間の内部にひそむ人間性の一部なのだ。宇宙人として人間に近づこうとしているボウイは、そういった人間性本来の仕組みのようなものには敏感だったはずだ。ベルリンのライブで彼は全身白の衣装に白い制帽を被って登場したことがある。その姿はナチスの党员のようにも収容所に拉致されたユダヤ人にも見える。被害者が加害者の姿で立っている、被害者はいつでも加害者に成り得る、それどころか被害者は同時に加害者でもあるということのもつ象徴なのだ。そういった自分自身のうちに潜むナチズム性を感じたボウイは自分の生まれた街ロンドンで過ごしてただけでは気付かなかった、イギリス人である前にヨーロッパの人間であるという自分を発見できたのだ。彼自身を見つけたボウイはペルソナを演じることはなくなった。

私はボウイのようにになりたいと思っていた。ボウイのようにになりたいというよりはボウイになりたかった。それはボウイの真似をすることでも、ボウイのように時代の先端を生きて若者から支持を得ようとするということでもない。私自身を知り、何かを演じるのではなく私自身を生き抜くことだ。ボウイは私の中にずっと存在していたし、これからも存在し続ける。だからどんな場所に行ってもボウイを見つけ出すことができるはずだ。私だけではない。全てのボウイという“概念”を信じる人々はいつだってボウイに会える。



FIVE YEARS -さわやかな破滅-

FIVE YEARS -Refreshing ruin-

一人芝居 約60分

作・演出・出演：秋草瑠衣子

場所：池ノ上 BAR GARIGARI

2016年12月1日～12月4日 全5回公演

全編にデヴィッド・ボウイの楽曲を使った音楽劇。

戯曲の中にその楽曲にちなんだ台詞や設定を盛り込んだ。

あと5年で地球が減んでしまうことを知った一匹のゴキブリが、地球を救うために本棚の裏にある隠れ部屋で同志と集会をしているところから話は始まる。

最初は「アンネの日記」のアンネのようなゴキブリが、地球を救うためにヒトラーのような演説をする。



北中 大志

KITANAKA, Taishi

立てない精神からの立つことの誕生

The birth of standing from the spirit that can not stand

「立てなくなる病」について

これは自身の身体的探求をテーマにしたパフォーマンスのためのテキストです。我々が無意識的に行っている「立つ」という所作を、日常生活の中から見つめ直し、よりリアルな生を獲得することを目的にしています。このパフォーマンスは日常生活における身体メソッドとしての方法論を取り入れており、この論文はそのパフォーマンスのためのメタ・テキスト的位置づけを持っています。以下、その書き出し、及び全体の構成です。

ぼくは「立てなくなる病」を発見し、自分自身が発症しました。その病の過程は、まず立っている自分が許せなくなり、立っていることが苦痛になり、やがて立てなくなります。症状の程度は時と場合により異なりますが、一時的に克服することは今のところ容易にできます。この文章では、立てなくなる病に関する自身の病跡の記録と臨床的実験、それらに基づく推測から、「立つとは何なのか」について考えていきます。

ぼくは多くの人が「立つ」ということにおいて、自分に嘘をついていると思っています。目が覚めてからふと立ち上がることも、立ちながら何かを待つことも、立った状態でしか歩行しないこともすべて、何かよくわからない自分というものの意思を無視しているように見えます。立つことが当然なことであると、勝手に思い込んでいるように見えます。そしてそれは立つことがいかにも普通に正しいことであると主張しているかのように見えてきます。これは大変まともでない考えなのかもしれませんが、もし「本当に立ちたい」と思った場合、このような立ち方をしてはいけません。すべてを捨て去り、一度立てなくなる必要があります。そのために第一話では、私たちがいかに唆されて「立たされているのか」を示していきます。

第二話では、実際に立てなくなるためにはどうしたらよいのか、どういう思考をすればよいのかについて考えていきます。立っていることが苦痛である状態を作り出すために「立たされている」という支配されているような感覚をいかに養っていくかを教授します。これによって容易に立ちた

くない状態へ陥れるようになります。しかしそうは言っても他人の目に晒されるような場で発症すると、立ちたくない精神と立たせてくる社会システムの力が激しくぶつかり合います。そこで精神的に屈してしまい、物理的に屈することができないと、徐々にフラストレーションが溜まっていてしまいます。そこで、いきなり立てなくなるのは難儀であるため、社会的な圧力を無視できるようになるためのステップとしてのワークも紹介します。

第三話では、立てなくなった後にいかに立つべきかを考え、本当に立つということに迫っていきます。本当に立つためには、病によって「立つ」というワザを一度放棄し、再び模倣するのではなく、自ら獲得していかなければなりません。そのためにはまず、生まれる日に戻らねばならない。そしてそこから突き詰めてゆくと胎児の歴史を遡り、あらゆる種の生物、あるいは未知なる生物との対面をせざるを得ない。死をも厭わなければ、非生物や宇宙のはじまりまで、いきます。

本当に立つことは不可能ではありません。このように自分に嘘をつけなくなるくらい、徹底的に「立つ」ということを疑い、正直に立つことによって、本当に立っている確信が生まれます。それは本当に立っているといえるのです。それはできます。

